

Alert 反天皇制運動 30 号

[通巻 412 号]
2018 年
12 月 4 日発行

第 30 期・反天皇制運動連絡会

今月の Alert

● 天皇「代替わり」——象徴も、神聖も問題にする闘いを—— * 2

反天ジャーナル ● ——たけもりまき、きょうごくのりこ、遺産放棄娘 * 3

状況批評 ● 米国へ向かう移民の群に何を見るべきか——日本への警告——太田昌国 * 4

ネットワーク ● 即位・大嘗祭違憲訴訟が始まります——佐野通夫 * 7

● 終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク 賛同の呼びかけ * 9

マスコミじかけの天皇制 (29)

● 「秋篠宮」発言をめぐる〈天皇（家）政治〉と〈安倍政治〉

——〈壊憲天皇明仁〉その 27——天野恵一 * 10

野次馬日誌 * 11 集会の真相 * 13 学習会報告 * 15

反天日誌 * 15 集会情報 * 16

世間は師走だそう。街の飾り付けも、TV の映像も、電車のつり広告も、道を歩く人びとも、そういわれてみれば、みなそのように見える。しかし、いったい師走らしさとはなんだ？

クリスマスと正月に向けた商店街の賑わいか。その賑わいのなかで、ボーナスで少し暖まった懷をちょびっと解放する嬉しい一時か。あるいは大掃除。あるいは短い休暇の嬉しさで悲しさ？

少なくともこの 30 年間、私には 12.23 集会と忘年会、大掃除と短い休暇の悲しさだけが師走の記憶かもしれない。その 12.23 集会も今年が最後となる、ということは、集会後の楽しかった忘年会もなくなるか……。お～、淋しい。いや、そういうことを言いたかったわけではない。

12.23 集会は、この日こそは天皇制の侵略戦争責任を、後からは植民地主義も加わって、天皇制の問題を考えるにふさわしい日であるとして始めた。植民地主義と侵略戦争のさなかに生まれた明仁の誕生日。そして「東京裁判」によって、A 級戦犯が処刑された日。天皇制の責任を問うにピッタリの「記念日」であり、ヒロヒトからアキヒトへの代替わりで、天皇制の植民地主義・戦争責任の問題が曖昧化されることを懸念する私たちには、とても空気の入る集会としてあった。

アキヒトからナルヒトへの代替わりで、私たちの懸念はさらに膨らむ。そして「記念日」に反対し、そこから歴史を紐解き、声を上げていく行動の一つが消える。12.23 がなくなろうと、天皇制の植民地主義・侵略戦争の歴史は残り、そのことへの無責任体制も続いている。これからの反天皇制運動はなかなか困難である……。「記念日」闘争が立ちゆかないだけの時間が経っているのだ。天皇「代替わり」を自分たちの時間に変えていく運動の過程で、そういったことも考えねば、だな。
(大子)



250 円

● 定期購読をお願いします (送料共年間 4000 円)

● 郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460 URL <http://www.ten-no.net/> mail: hanten@ten-no.net

● 以前の情報はこちら ▶ <http://hanten-2.blogspot.jp/>



今月の
Alert

天皇「代替わり」——象徴も、神聖も 問題にする闘いを!

本号のこの欄で、真つ先に取り上げるべきは、なんといつても一月三〇日に公表された秋篠宮記者会見報道をめぐる一連の動きだろう。

秋篠宮は、「宗教行事と憲法との関係はどうなのか」ときに、やはり内廷会計で行うべきだと思っています」と述べ、大嘗祭が天皇家の私費とされる「内廷費」で賄われるべき、「大嘗祭自体は絶対にすべきものだ」が、「できる範囲で身の丈に合った儀式で行うのが、本来の姿ではないかなと思います」などと述べた。

すでに報道でも指摘されているように、これが前回の「代替わり」をめぐる各地で巻き起こった政教分離訴訟などの議論を意識していることは間違いない。発言によって政府が「政教分離論争の再燃を懸念」とも報じられている。

だが、「皇室の行事には私の考えというものがあってもよいのでは」と秋篠宮が前置きして発言していることに注目すべきである。これはつまり、大嘗祭をめぐる政教分離とは何かという議論の枠を、たんに内廷費か公費（宮廷費）かという範囲に限定させる、皇室の側からの枠組み設定としてとらえなければならない。実際、大嘗祭の儀式内容は不問にされたまま。マスコミの整理も、「国民のために五穀豊穡を祈る儀式」などと説明するだけで、それが新天皇が「天皇霊」を身にまとう「国家神道」的な神格化儀式であることは語られない。大嘗祭という儀式そのものの内容も、きちんと問われなければならないのだ。

皇室の私事とされるいわゆる「宮中祭祀」も

問題だが、大嘗祭は、その規模も社会的影響も格段に異なる宗教儀式である。内廷費だから私的な行為であり、政教分離に抵触しないなどということはできない。政教分離原則が規定しているのは、国家の機関が宗教行為をしてはならないということだ（私たちは、天皇制自体がひとつの宗教だとも考えるが）。だいたい、内廷費自体が税金である。仮に莫大な資金のかかる大嘗祭のために内廷費の特別加算がなされればそれでよいのか。

この発言をめぐるのは、今号のニュースではかの筆者も触れているし、来年の一連の「代替わり」儀式に対する差し止め訴訟を呼びかける文章も入っている、これ以上はふれない。秋篠宮の発言は、いわばこの訴訟に対する「先制攻撃」であるとさえいえよう。政教分離を狭い形式的な論議だけにしてしまつてはならない。

さて、反天連では今年も12・23に討論集会をもつ。この日が「天皇誕生日」であるのは今回で最後だ。「平成三〇年」を通して確定されてきた戦後象徴天皇制国家の到達点を確認し、「次」の天皇制の動向についても、ある程度測定しながら来年一年間の闘争方向を議論していく集まりにしたい。

また、すでにお知らせしているように、この間、首都圏においては、各地で反天皇制運動に取り組んできたグループが、反元号署名運動など共同した行動を積み重ねながら、「代替わり」反対の大きなうねりを作り出すべく動い

てきた。一月二五日には、集会二〇〇名、デモ二二〇名の参加で、「終わりにしよう天皇制2018大集会&デモ」と銘打った行動に取り組んだ。そしてこの日をもって私たちは、「終わりにしよう天皇制!『代替わり』反対ネットワーク」(略称・おわてんねっと)を正式に結成し、さまざまな行動に取り組んでいくことにした。賛同団体を募っている、詳しくは本紙に掲載した呼びかけ文を見ていただきたい。

おわてんねっととしての次の取り組みは、二月二四日に予定されている天皇在位三〇年式典に反対する行動だ(詳細未定)。これは、「天皇陛下御在位三十年を記念し、国民こそつてこれを祝う」行事で、国立劇場でおこなわれる。これが「天皇陛下の御退位及び皇太子殿下の御即位に伴う式典準備委員会」の決定であるように、天皇「代替わり」儀式の一環としておこなわれるものである。具体的には、「おわてんねっと」で、ブログやTwitterを検索してほしい。

さらに、例年取り組んでいる反天皇制運動の実行委員会の2・11反「紀元節」行動の準備も始まっている。即位・大嘗祭において前面化する、象徴天皇制においても確実に保持されている天皇制の神権主義的な側面が、日本の「文化、伝統、歴史」や天皇の「祈り」なるものを通じて、全体としての象徴天皇制の統合機能の重要な構成要素としてあること。こういった問題をあらためて問うていきたい。近く呼びかけを発することになるので、こちらへの参加賛同もよろしく願います。

(北野誉)

「平成の終わり」に反天皇を叫ぶ意味

人生二度目の天皇代替わり期に際して、直球で反天皇（制）！を叫ぶようになっていた自分を認めざるを得ない。ヒロヒトよりアキヒトはまだマシとは思ってゐるわけではないし、よりメンドクサイことになっているとは思つ。戦後リベラルを標榜し、「親父のように嫌われたくない」とでも言いたげなニコニコ顔は、国民を「一億総嫌われたくない症候群」へと導いた。多分、その裏にはやっぱり日本人はえらくて立派なんだよねという排外的空気がある。かの大企業ニッサンですら「ゴーン叩き」しかできず、外国人を労働力としてしか受け入れられず、「引きこもり」「過労死」などをスルーして人手不足を煽るだけの日本政府。

そんなつまらぬ血統にしがみつく「平成の終わり」に、自分は朝鮮人であるということを明快に主張して生きている朝鮮学校コミュニティに吹く空気がさわやかだ。高校無償化裁判でことごとく続く「敗訴」にもめげずに、今こそ街で声を上げ始めた日本で生きる若者たちだ。真の民族的アイデンティティを掲げる彼らの前でこそ、天皇の戦争責任を叫び、ともに天皇制に対抗する社会を築いていけたらと小さく思つ今日この頃である。

（排外主義にNO！福岡／たけもりまき）

アンチ五輪トーチ 燃えろー！

韓国から「平昌オリンピック反対連帯」の仲間たちがオリ・パラ開催地に引き継がれる反五輪トーチを持ってやってきた。アンチ・トーチは2010バンクーバーで誕生。便器に使うラバーカップを聖火に見立てた優れもの。ロンドン、ソチ、リオ、平昌を経て東京へ。自然破壊と開発による住民排除に抗して闘う多くの人々からバトンタッチ。

時代錯誤の五輪開催。東京の次は、ハンブルク、ブタペスト、ローマが撤退、パリ（2024）、ロス（2028）同時決定という異例さだ。2026冬季は住民投票の結果カルガリーが撤退、札幌も立候補を見送った。

錯誤でも、開催には無論大きな意味がある。原発事故からの「復興」を掲げた惨事便乗型資本主義で儲ける奴らは誰だ！一〇月には聖火リレー本番誘致のための模擬リレーをいわき市等が開催、小中高生二〇〇人に国道二六号線を走らせた。事故収束には程遠い福島で、Jビレッジをスタートに子どもらを動員するやり口に胸が痛む。

最終日、利権絡みの五輪建設ラッシュの東京湾岸ツアー。選手村は五輪後、一、六一一億の土地を二九億円で民間に売却予定で「HARMIFRAG」（二四棟五六三三戸二〇〇〇人の街として再開発）の看板が。アンチ・トーチの炎は民衆の怒りだ。燃えろー！（きょうけいのりこ）

流行語大賞「負の遺産」!?

なんと時間の流れが早いこと！ あっという間に師走に入り、今年も残りわずか。この一年「腹立つ！腹立つ！」を何度となえたことだろう。その回数は増すばかりである。

ところで年末になると流行語大賞なるものが発表されるのが恒例だが、私的には「負の遺産」を推したい気分。

まず膨大な軍事費。米兵器のローンの急増で、防衛省は国内防衛関連企業六二社に対して、防衛装備品代金の支払いの延期を要請。それにしても防衛関連企業がこんなに多いとはこれといった間にやらで驚きである。

そして、二〇二五年の大阪万博決定。バブル崩壊後に事業が頓挫していた「夢洲」が会場とこのこと。五輪施設の労働現場の過酷さが漏れ伝わってくる。入管法改正案も強行採決されたが、建設現場では外国人労働者への「違法」が横行しているという。五輪の次は万博とはあきれるばかりだ。現場の過酷さといえば原発労働者。福島原発事故から八年目にもなるというのに、事故処理もできない状態で、「温暖化対策」を盾に政府は新小型原発開発方針を打ち出した。まあ次から次に「負の遺産」を増やし続けてくれること！ えっ大嘗祭に二億円！ 天皇制、これが負の元凶か。「腹立つ！」（遺産放棄娘）

反

天



ジャーナル

状況批評

思想・状況・批評

米国へ向かう移民の群に何を見るべきか

日本への警告

太田昌国（民族問題研究）

今から四〇年以上も前、私は当時放浪していたラテンアメリカ地域で幾度も陸路の国境を越えた。多くの場合、或る国の出国手続きを税関で終えると、次の国の入国税関までは、牧歌的な野山の風景の中を何百メートルか歩くと、目的の建物へ着いた。大都市に直結する国際空港と違って、陸続きの国境はどの国にとっても「辺境」にあつて、税関にも必要最小限の人員しか配置されておらず、出入国手続きを管理してさえいればいいのさ、という印象を受けた。税関職員も、その国が厳格な軍事政権下でない限りは人懐っこく、あれこれ冗談を言いながら、ゆったりと「職務」を果たすのだった。国境付近に住む人たちは、お互いに旅券なしで自由往来しながら、お互いの田畑で収穫した物の売り買いや物々交換をしていた。それは、「国境」なるものの人為性を思わせられる光景であつて、したがって、大げさに言えば、国境なき／国家なき「類的共同体」の未来像を幻視できる現場でもあつた。

だが、最初に越えた国境は違った。ロサンゼルスでしばらく過ごした後、本来の目的地であるメキシコへ陸路で向かった。サン・ディエゴでグレイハウンド・バスを降りて、何車線もの広い車道の脇を通つて、米国の出国税関に入る。メキシコへ向かう米国人の車はぎっしりだが、旅人以外に歩いている者はいない。無機質というかビジネスライクというか、およそ人間味のない応対を受けて後、しばらく歩いてメキシコ側へ着く。饒舌な税関職員とのやり取りを終えて、税関の外に一足歩み出ると、そこはカオスだ。荷物を持ってあげる、ホテルに案内するよ、タク

シーに乗らないか、ピーナツは要らないか、マンゴーだよ——ありとあらゆる声が掛かってくる。幼い子どもたちも多い。大丈夫、自分でやるし、今は要らない——と遮りつつ、こころは、なぜか、浮き立つ。人間臭いその雰囲気は、数週間過ごしたロサンゼルスのととはまったく違うのだ。メキシコ側の国境沿いのその町は、ティファナといった。見える景色、建物の様子、ひとの顔立ちも振舞い方も一変した。米国との貧富の差は、もちろん、歴然だ。メキシコを舞台にしたサム・ペキンパーの映画のシーンがいくつも目に浮かぶようだ。

それから四五年、今この町には、主として中米ホンジュラスを出て米国への入国を目指す人びとが続々と詰めかけている。米国のトランプ大統領は、移住希望者の〈長征〉が始まるや否や、国境に軍隊を配備して入国を阻止すると豪語したが、数千キロの道を歩き続ける人びとは一様に「故国ではギャングによる殺人事件が多く、とても生きてはいられない」と語っている。他方、九千人もの移住希望者が一気に押し寄せてきて、治安・衛生管理などの面で不安を抱えたティファナの住民が「移民反対」の集会を開いたとか、国境の強行突破を試みた一部の人びとに対して、配備されている米国軍が催涙ガスを発射して撃退したとかのニュースも流れた。とうとうここまで来たか、と私は思った。

ホンジュラスといえば、二〇世紀初頭から半世紀、米国のユナイテッド・フルーツ社が思うがままに支配した「バナナ共和国」の先駆けだ。対米輸出に圧倒的に頼らざるを得ないホンジュラスの歪な経済構造は、

そこから生まれた。二〇世紀後半の現代になっても、ラテンアメリカ地域は、大国と国際金融機関が主導するネオリベリズム（新自由主義）の政策路線によって世界に先駆けて席捲されてきた。それは、貧しい第三世界諸国が、資産・所得の公平な再分配や福祉に重点を置いた社会改革政策を行なわないまま、市場原理を軸にした経済の自由化や規制緩和を押しつけられる路線だ。ネオリベリズム路線は、その後先進国にも逆流して、日本でもとりわけ小泉・安倍政権下で推進され続けられてきているから、私たちも、企業に有利な労働条件・雇用形態の改定、福祉切り捨て、公共部門の廃止と民間「活力」の採用などの政策を通して、その破壊的な「猛威」を知っていよう。

この路線の下では、第三世界諸国の場合は、融資と引き換えに、国際収支の改善と債務返済を優先させられる。バナナやコーヒーの輸出で外貨を稼いでも、それは国内民衆に還元される以前に債務返済に充てられるのが条件だから、先進国に還流してしまう。その繰り返しだ。ホンジュラスでも、一九九〇～九四年のラファエル・カジェーハス政権がこの路線を推進した。それ以外の時期でも、例えば、隣国のニカラグアやエルサルバドルが革命的な激動の時代を迎えていた七〇年代後半から八〇年代初頭においても、米国は自らに忠実なホンジュラス政権を都合よく利用した。ニカラグアに革命政権が成立した一九七九年以降は、ホンジュラスの米軍基地を強化し、北部国境から反革命部隊（「コントラ」と呼ばれた）を侵入させて、革命を潰そうとした（これは、ケン・ローチ監督が一九九六年に制作した映画『カルラの歌』に描かれているから、ご覧になった方もおられよう）。二〇〇六年、ホンジュラスには珍しくも、マヌエル・セラヤを大統領とする中道左派政権が成立すると、米国は右翼を支援して、二〇〇九年のクーデタでこれを倒してしまった。その後いかなる性格の政権が出来て現在に至っているかは、推して知るべし、だろう。総人口九二〇万人のうち貧困ライン以下の生活者は六〇〇万人

を超えているという。対人口比の殺人事件発生率も世界一高い。それが、「移民ギャラバン」に加わる人びとがいう暴力の根源なのだろう。

ジャーナリスト・工藤律子に、『マラス——暴力に支配される少年たち』と題するすぐれたルポルタージュがある（集英社、二〇一六年。現在、集英社文庫）。ホンジュラスの若者ギャング団「マラス」を取材した本書は、今回の事態を予見したかのような好著だ。工藤によれば、ホンジュラスでマラスの存在が表面化したのは一九九〇年代初頭である。新自由主義路線に忠実な、前記ラファエル・カジェーハス政権期に重なり合う。当時、米国はカリフォルニア州知事が、犯罪歴のある中米出身の若者たちを本国へ送還する追放策を実施していた。ホンジュラスにも三千人の若者が戻ってきた。

ラテン系住民がもともと多いカリフォルニア州では、一九二九年の世界恐慌以来、極貧状態・家庭崩壊・失業・雇用機会の欠如・低い教育水準・差別などの社会問題を背景に生まれた若者ギャング団が「脈々と」受け継がれている。米国の移民政策には、レタスの収穫期のような繁忙期になれば「不法」入国者であっても雇用し、閑散期になると国外追放するという一貫した路線がある。これでは、右に挙げた社会問題が一向に解決され得ないことは、容易に見えてとれよう。故国に追放された三千人の若者の、ホンジュラス↓米国↓ホンジュラスという往還をめぐる物語は個別にあるには違いないが、背景には共通のものがあろう。追放された一九九〇年以降の時期にそれら若者の年齢が二〇代から三〇代であったと推定するなら、時代的には以下の共通の背景が考えられる。（１）米国政府と多国籍企業によるホンジュラスの政治・経済・社会の全的支配、それは同国の「国家主権」を侵すほどの水準だろうが、国内には米国に癒着してこそ利益が得られる一部寡頭階級が伝統的に形成されているよう。（２）若者たちは、その体制の下では仕事がないからこそいったん米国へ出たのだが、故国に戻っても、政権が追従している、社会的格

差を是正する政策を欠いた新自由主義路線の下にあっては、働き口は容易には見つからなかっただろう。(3) 社会の最下層に押し込まれた人びとが掴まされている、底辺に澱のように、しかも重層的に積み重なった「マイナスのカード」をひっくり返すのは容易なことではない。(4) ニカラグア革命を潰す「コントラ」戦争への加担を強いられる中で、圧倒的な軍事力を誇る超大国の「価値観」を多かれ少なかれ刷り込まれただろう。米国が、自分の国(ホンジュラス)に設置した軍事基地を最大限に活用して、他民族(ニカラグア)の土地で発動する「低強度戦争」を見て育った彼らは、超大国が「敵」にふるう有無を言わせぬ暴力の「価値」を、哀しくも、身体化せざるを得なかったかもしれない。

他にも共通の背景を挙げることはできようが、これで十分だろう。政治の任に当たる国内政治家とそれを支える外部勢力が、そこに生きる人びとがまっとうに生きることのできる条件を整備するどころか真逆の政策を採用し、それによって一部の者たち(外部の超大国と国際金融機関、および国内の少数支配層とその取り巻き連中)の手に富を集中させ、その路線を実現するために必要とあらば躊躇うことなく暴力(戦争)をふるうも——これこそが、幼かった／少年だった／青年になりかけていた彼らが見せつけられ、身に染みて体験した世の中の現実だった。彼らが仕事を求めて行き着いたロサンゼルスで、またホンジュラスは首都のテグシガルパに送還されて、個人や集団(マラス)のレベルで、かの国家に似せたふるまいをしたところで、いったい誰がそれを非難できよう？ 歴史的に見て、古今東西南北、「国家(＝政府)」の側がこのような自らの所業について反省し、生き直すことはきわめて稀だ。ホンジュラスに対して一世紀以上にもわたって、右に見たような不正常な関係を一方的に押しつけてきた米国の現大統領の発言は、そのことを一点の曇りもなく証明している。だが、工藤の書『マラス』は、かつてこの集団に属して乱暴狼藉の限りを尽くしていた元若者が、その後送っている別な人生

の在り方を、最終章「変革」で描いている。その前の章では「マラスの悲しみ」も描かれていて、「生まれつきのマラス」ではあり得ない人間の変革可能性が暗示されている。

ホンジュラスを出発した「移民キャラバン」の因果の関係をいくらか長く述べてきたのは、ほかでもない、「移民問題」に関わって日本の現状を対象化するために、である。排外主義的な本質を陰に陽に見せつけてきた安倍政権は、二〇一八年六月、いわゆる「骨太の方針2018」を閣議決定し、新たな外国人労働者受入れ制度の創設を表明した。外国人労働者の導入は、安倍政権の支持基盤である排外主義的右翼層の離反を招きかねない「危険な」政策である。法務省が「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律案の骨子について」を公表したのは一〇月一二日のことだった。衆議院での審議入りは一一月一三日、それから二週間有余の現在(二月一日)、政府はろくな答弁もできないままに衆議院を強行通過させ、審議は参議院に回されている。審議が深まって、いろいろな現実があらさまになつては困るのだろう。外国人労働者を「雇用の調整弁」としか考えていない政府・企業・社会の現状では、移民受け入れの長い歴史の果てに現在がある米国とも違う深刻な問題を私たちは抱えることになるだろう。今ですら、食い物にされてきた実習生や性産業に働く女性たちの怨嗟の叫び声が、この社会の片隅には充滿しているのだ。「偏見」が商売になり、政治家の嘘などには誰も関心を寄せなくなったこの社会には……。

(12月1日記)

即位・大嘗祭違憲訴訟が始まります

佐野通夫（即位・大嘗祭違憲訴訟の会呼びかけ人）

「反天連」のニュースですから当然のことですが、私は改憲論者です。1条から8条までは廃止しなければなりません。しかし、現憲法を改正するに至っていない現在では、違憲（壊憲）行為には反対していかねければなりません。

二〇一九年に天皇が退位し、皇太子が即位するということが言われています。

二〇一六年の天皇の「ビデオメッセージ」に始まった「退位」騒ぎは、二〇一七年六月一六日に次のような「天皇の退位等に関する皇室典範特例法」という「法律」を作りました。

「この法律は、天皇陛下が、昭和六十四（一九八九）年一月七日の御即位以来二十八年を超える長期にわたり、国事行為のほか、全国各地への御訪問、被災地のお見舞いをはじめとする象徴としての公的な御活動に精励してこられた中、八十三歳と御高齢になられ、今後これらの御活動を天皇として自ら続けられることが困難となることを深く案じておられること、これに対し、国民は、御高齢に至るまでこれらの御活動に精励されている天皇陛下を深く敬愛し、この天皇陛下のお気持ちを理解し、これに共感していること……」

不気味な条文です。法律名では「天皇」となっているものが、条文の中では「天皇陛下」と「天皇」に書き分けられています。人間明仁を指すときに「天

皇陛下」、制度上の役割を示すときには「天皇」としているかのようですが、法律なのに敬語が満載されてもいます。

日本国憲法が規定している国事行為以外の天皇の行為は、憲法原理からは認められるものではありません。「象徴としての公的な御活動」なぞ、憲法上存在しないのです。それどころか、天皇は憲法が定めた特別の公務員として「憲法を尊重し擁護する義務を負」います（日本国憲法第99条）。

天皇は憲法上、世襲の「象徴」とされており、天皇となるための手続きは何も書かれていません。しかし、現天皇就任の際の一九九〇年には、「即位の礼・大嘗祭」が二三億円という膨大な税金をかけて行なわれました。皇室典範には「皇位の継承があったときは、即位の礼を行う」とありますが、即位の礼の内容についての定めもなく、大嘗祭は、記載すらありません。実際に行なわれた即位礼と大嘗祭をふくむ一連の諸儀式は、政教分離・主権在民原則の憲法原理に反するものであり、このときにおこされた訴訟で大阪高裁は、「違憲の疑い」を明確に判示しました。

そもそも、「すべて皇室財産は、国に属」するもの（日本国憲法第88条）であり、その財産も、天皇が日常的に使っている経費も、もともと私たちの税金です。私たちは、天皇の生前代替わりに際して、このよ

うな憲法違反の行為に税金支出をさせないよう、公費支出差し止め訴訟（納税者訴訟）としてこれを問う裁判を起こします。

一月九日には、文京シビックセンターにおいて五〇人の仲間とともに、即大違憲訴訟の会・立ち上げ集会を行ない、大阪高裁判決を勝ち取った加島宏弁護士から「二〇一九年代替わり儀式の法的諸問題——先の即位礼・大嘗祭訴訟の経験を踏まえて——」

を学びました。また、提訴予定であることが、東京新聞はじめ、全国一〇紙以上に掲載されました。すなおに考えれば、問題満載の天皇制と代替わり儀式ですが、先方はさつそく警戒しているのか、「原告が提起しようとしている訴訟が、少なくとも現行の司法制度においては、いかにおかしいものであるか理解できることでしょう」と結論づける怪しげな弁護士（？）ブログが登場したり、ついには秋篠宮に「大嘗祭については内廷費（手元金）でやるべきではないか」と発言させたりしています。年間約三億円の内廷費（これもゴーンの給与と同じく庶民から見たら信じられない金額ですが）では、前回二〇億円以上上かかったともいわれる大嘗祭の費用を賄えないと見越しながらの「国民に配慮する姿を伝えたい」とアピールするための発言です。そもそも内廷費も税金であり、本来はその金額や使い道も精査されるべきです。内廷費を使えば政教分離原則には抵触しないとはなりません。

第1次提訴分は締め切りますが、今後も原告を募集し、第2次提訴、第3次提訴を継続する予定です。多くの方の参加を願います。私たちのHP (<http://sokudai.zhizhinet>) をご覧いただくか、もしくは sokudai@mail.zhizhinet までご連絡ください。

戦前の日本が、世界恐慌の果てに「一君万民」思想を生み出し、天皇制ファシズムをもたらした歴史を想起しないわけにはいきません。私たちはどんなに苦難に満ちていても、労働運動の力によって生活を向上させる道を放棄してはいけません。



●神格性を保持しつづける象徴天皇制

大嘗祭（2019 年 11 月予定）を頂点とする一連の代替わり儀式は、天皇の神格継承の意義が込められた国家神道的なものです。象徴天皇制は、「神」から「人間」への移行では決してなく、「神」と「人間」の同居／使い分けこそがその本質です。「人間性」を深く喧伝される明仁が、父・裕仁以上に宮中祭祀に熱心だった事実を忘れるわけにはいきません。重点を移しながらも「現人神」の思想は戦前・戦後を貫いているのであり、その動員力の危険性は変わることはありません。

「おわてんねっと」は、来年 11 月に予定されている大嘗祭まで、明仁退位・徳仁即位の全過程に抗議、マスコミや行政などを通じて拡散される奉祝賛美キャンペーンに反対していきます。巨額の税金を投入して行われる種々の代替わり儀式に異議申し立てを行います。

「終わりにしよう天皇制」は、自由と平和、平等と民主主義を求める私たちの合言葉です。天皇制の名のもとに殺され、屈辱を強いられた無数の人々、天皇制テロルに倒れた人々と共にある言葉です。

無理に無理を重ねなければ存続しえない彼らは決して盤石ではありません。「代替わり」という天皇制最大の動揺期に、ともに声を上げる同志を募ります。おわてんねっとへの賛同を！行動への参加を！

2018 年 11 月 25 日

終わりにしよう天皇制！『代替わり』反対ネットワーク（おわてんねっと）

□連絡先 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-31 キリスト教事業所連帯合同労組気付・靖国天皇制問題情報センター方
TEL:090-3438-0263 mail:owaten@han.ten-no.net ツイッター:「おわてんねっと」

【呼びかけ団体】

- 靖国・天皇制問題情報センター
- 「日の丸・君が代」の法制化と強制に反対する神奈川の会
- 反天皇制運動連絡会
- 天皇制いらないデモ実行委員会

●【終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク（おわてんねっと）】は、2019 年 11 月に予定されている大嘗祭まで、1 年間の期間限定の活動を通じて、天皇「代替わり」総体に集中的な反対運動を行います。

○【おわてんねっと】は賛同団体を広く募ります。普段は違うテーマで活動されている皆さん、主体的に運動を担うことが困難な皆さん、どんな少人数の団体でも、賛同団体に名前を連ねていただくことは大歓迎です。

●【おわてんねっと】賛同団体は、インターネットを含む団体名の公表が前提です。賛同費は無料です。

○【おわてんねっと】の諸活動の方針は、月に 1～2 回開催される事務局会議で決定します。

●意見の違いを暴力をもって解決しようとする団体の賛同はおことわりします。

【終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク（おわてんねっと）】に賛同します

団体名：

連絡先（住所/メール）：

▼団体名はインターネットをふくむ公開が前提です。 ▼「おわてんねっと」連絡先まで賛同の旨、連絡下さい。

終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク

◆賛同のよびかけ◆

●憲法に違反して「代替わり」の道筋を作った明仁

いよいよ天皇「代替わり」の時期が近付いてきました。このたびの「代替わり」は天皇自らが退位を宣言し、世論を先導するかたちで国会を動かし、立法までさせて道筋をつけたものです。「憲法を守る」と宣言して30年前に即位した明仁天皇は、憲法に違反して退位を実現させようとしています。

この退位と「代替わり」は、決して人間的な共感をもって迎えられるべきものではありません。明仁は2016年8月の「おことば」の中で、退位の目的を「象徴天皇の務めが途切れることなく、安定的に続いていくこと」と明確に述べています。明仁の狙いは一貫して天皇制の維持・強化にあるのです。

●米国主導の戦争に同調しつづけた明仁

安倍政権の強権的な政治が続くなかで、天皇の言動に政権への対抗的な意味合いを持たせる見方が広まったのも「平成」時代の特色です。しかし一層強まる米国への外交・軍事的協調路線は、天皇制とまったく矛盾のないものです。

明仁は、2001年9月の「米NY同時多発『テロ』」時には、ブッシュ大統領に「異例の弔意」を送り、続くアフガニスタンでの「対テロ戦争」では、「戦争による解放」を祝いました。また、イラクに派遣された自衛官を皇居に招いてねぎらいました。「平成」時代の後半、世界で展開されてきた米国主導の「対テロ戦争」に対して、明仁は同調する姿勢を貫いてきたのです。

●侵略、植民地支配責任を取れなかった平成天皇制

冷戦が終わり「平成」時代を通じて、日本政府は侵略や植民地支配の被害者への謝罪や補償を果たすことができませんでした。天皇は92年の訪中や韓国大統領の来日時などに、戦争や植民地支配に関わる発言をしましたが、天皇制の戦争責任への視座を全く欠いた無責任なものに過ぎませんでした。

「昭和天皇は平和を愛していた」と繰り返し述べる明仁の歴史観は、日本社会の歴史観を限界づけてきました。「無責任の象徴」たる天皇を戴いている限り、侵略の歴史を直視することはできません。

●「女性は産む機械」をつづける万世一系

皇位継承問題をめぐって天皇制が大きく動揺したのも、「平成」時代の特徴です。「お世継ぎ」プレッシャーによって皇太子妃雅子がおちいった事態に見て取れるように、皇位継承問題の矛盾は大きく顕在化しました。「国民統合の象徴」が血統主義によって継承される以上、「女性は産む機械」という価値観が日本を支配し続けるのは避けられません。これは、女性天皇であろうと、女性宮家であろうと変わりません。

●メーデーの日を篡奪する新天皇即位

新天皇の即位日が、5月1日に設定されたことも大きな問題です。国境を越え、歴史的想像力をもって労働者の連帯が祝われるべきメーデーの日に、徳仁は即位するのです。新天皇徳仁は、これまでも誕生日会見などで「若者の格差」、「貧困の再生産」に言及するなど、世界を覆う新自由主義が生み出した社会分断に「上からの調和」をもたらすことを自らの使命と感じている節があります。

マスコミの制
天 皇 29

「秋篠宮」発言をめぐる〈天皇(家)政治〉と〈安倍政治〉

—〈壊憲天皇明仁〉その27



一月二五日、私たちは「終わりにしよう天皇制！『代替わり』反対ネットワーク」結成行動を、芝居・コント・歌・講演という、にぎやかなメニューの集まりで実現。もちろん、日常化している右翼の暴力的介入つきのデモンストレーションも。

天皇家の方も「生前退位」・「即位礼・大嘗祭」に向けて、ハデに政治的に動き出している（まあ彼や彼女らは、常にマスコミの全面バックアップつきだからド派手は当然なのだが）。

一月三〇日の秋篠宮五三歳の誕生日に、いっせいに報道された二二日の秋篠宮（夫妻）の記者会見は、全マスコミあげて大々的に報じられている。例年より長く「七〇分にも及んだ」質疑応答の内容にもふれた『週刊文春』「小室圭さんから辞退を誕生日記者会見でも語られなかった秋篠宮さまの真意」（12／6号）には、こうある。

「秋篠宮家関係者が語る。／『驚くべきことにはできない』という趣旨の発言をされたようです。／今年二月に結婚を再来年に延期することが発表されたため、当初三月に予定されていた（一般の結納にあたる）納采の儀を行っていない。そのため、小室さんは現状では正式な婚約者ではないとされている。／『納采の儀を行うためには、手続き上、当主である秋篠宮さまが、できない』と断言されたということは、今も眞子さま

と小室さんのご結婚は認められていないことを意味します」（同前）。

「眞子さまの結婚に向けた意思は依然、固いとされる。一方で、秋篠宮ご夫婦は会見での発言内容を『眞子さまに事前に確認はされていない』（前出・宮内庁関係者）ようで、つまりこの会見でのさまざまな重要発言は、眞子さまに対する両親からのメッセージと言えるのだ」。

「このままでは残念ながら破談に向かっているかざるを得ないように見えるが、／『たとえそうだととしても、皇族の眞子さまの方からそれを言い出すわけにはいきません。小室さんには、そうしたすべてを思い巡らせて、自らの責任で判断をしていただきたい』と秋篠宮さまはお考えになっているのです」（同前）。辞退して（破談）にしてくれというメッセージ、そう読むべきだというわけだ。『週刊新潮』（12／6号）の方は一〇月二〇日の美智子記者会見発言も、隠された「破談メッセージ」であったという記事もプラスした、秋篠宮発言は「千代田のお城」からの「さよなら」メッセージであるとの解説記事である（「不快感を隠されなかった『秋篠宮』会見の高すぎる『納采ハドル』」。「神権主義天皇制」ヨイショメディアであるこの二誌は、あらかたのメディアで大きく取り上げている「大嘗祭は内廷会計で賄うべき」という安倍政権の、昭和「Xデー」を踏襲した政治プログラムを公然と批判したという、もう一つの

大問題については、とりあえずはまったく無視という方針で一致している。この点は、女性週刊誌の方も右へ做えである。

「生前退位・即位」という一大ナシヨナリズムイベントの前段で、安倍政権の日本（人・文化）万歳を政治演出する「祝賀」ムードづくりにも最適な「眞子結婚」イベントは、すでに実現していたはずだったが、思わぬ迷走に入りオジャン。天皇家は、失敗の後始末にアタフタしているわけだ。こうなりや、眞子の意思などどうでもいい、「破談へ持ち込め！」これが安倍政権・マスコミ・天皇家の一体化した意思であることが、一連の報道からよく読める。

もう一方の、憲法二〇条の政教分離原則を踏まえて「内廷費でムダの少ない大嘗祭を」の発言の方、これをとりあえず無視した週刊誌（『文春』『新潮』）の意思は、新聞では政府の方針に公然と反対することは憲法上許されないという「違憲」を口実にした右派知識人の批判的コメントに示されている。これに対して、「秋篠宮は天皇ではないのだから憲法上の問題はない、二〇条を踏まえた正しい意見だ」という、反安倍「リベラル」派の発言も大きく浮上している。内廷費もすべて税金である、それに「大嘗祭はある意味の宗教性が強い」などと発言しているが、連続する即位の儀礼のすべてが「万世一系」の「現人神」になる、あるいはそれによる儀式なのだから、まると宗教儀礼だ。（政教分離）原則を言うなら、すべて行うべきものではない。「大嘗祭自体は私は絶対にすべきものだと思います」。この秋篠発言でどうして安倍政治と対決しているなんて評価がうまれるのか！

11月1日〜11月30日

11月1日〜11月30日

【11月1日】

明仁、美智子、絢子◆10月29日に結婚した故高円宮の三女絢子と日本郵船社員の守谷慧が皇居・御所を訪れ、明仁、美智子に結婚式が無事終了したことを報告。

美智子◆宮内庁が、体調を崩していた皇后について、せきぜんそくと診断されたと発表。

徳仁、雅子◆東京・丸の内のホテルで開かれた「灯台150周年記念式典」に出席。

久子◆故高円宮の妻久子が、伝統的工芸品月間国民会議全国大会に出席するため、福岡県を訪問。

元号◆菅義偉・官房長官が記者会見で、翌年5月1日の新天皇即位に伴う改元による中央省庁の情報システムの改修作業に関し「新元号の公表日を改元1カ月前と想定して準備を進める方針」。

【11月3日】

明仁◆皇居・宮殿で行なわれた文化勲章の「親授式」に出席し、受章者に勲章を手渡す。

【11月4日】

代替わり◆超党派の国会議員連盟と財界などが、徳仁の新天皇即位に伴う奉祝集会を翌年秋に開く方向で検討していることが分る。

【11月5日】

天皇、皇族◆明仁、美智子が、「文化勲章」受章者と「文化功労者」を皇居・宮殿に

招き懇談。徳仁、雅子と秋篠宮、紀子が同席。

明仁在位30年◆明仁在位30年を記念した1万円金貨と500円銅貨の打ち初め式が、大阪市北区の造幣局で開かれる。

元号◆政府が、翌年5月1日の徳仁の新天皇即位に伴う改元を控え、新旧の元号は商標登録できない対象であると明確にするため、審査基準を翌年2月をめどに見直す方向で検討に入ったと、菅義偉・官房長官が記者会見で明らかに。

【11月6日】

明仁◆「秋の叙勲」のうち、大綬章の「親授式」が皇居・宮殿「松の間」で開かれる。

常陸宮◆東京都港区のホテルで開かれた「ねむの木賞」の贈呈式に出席。ねむの木賞は、美智子が作詞した「ねむの木の守歌」の著作権を「日本肢体不自由児協会」に贈ったことを記念し創設されたと報道。

代替わり◆公明党が政調部会長会議で、徳仁が新天皇に即位する2019年5月1日と「即位礼正殿の儀」が行われる19年10月22日を、その年一回限りの祝日扱いとする特別法案を了承。

【11月7日】

明仁、美智子◆訪日中のマレーシアのマハティール首相夫妻を皇居・御所に招き、共に昼食。

美智子◆東京都港区のサントリーホールで、国際的なピアノリスト内田光子のリサ

イタルを鑑賞。終了後、内田と懇談。

徳仁、雅子◆徳仁が、全国農業担い手サミットの開会式などに出席するため、山形新幹線で山形県入り。

秋篠宮◆国内外の水族館関係者が集まり、海の環境問題などを議論する第10回世界水族館会議の開会式が福島県いわき市で行われ、開会式で、日本動物園水族館協会の総裁を務める秋篠宮が「会議が、水族館の役割を国際社会に発信していく場になることを期待します」と英語であいさつ。

【11月8日】

明仁、美智子◆東京都新宿区の明治神宮外苑にある聖徳記念絵画館で、明治維新150年を記念した特別展「明治日本が見た世界」を鑑賞。

徳仁◆山形県上山市の県立ゆきわり養護学校を訪れ、幼稚部や小学部の授業のほか、高等部の生徒らが文化祭のバザーのリハーサルに取り組む様子を視察。

雅子◆宮内庁東宮職が、明仁、美智子「主催」の9日の園遊会に、雅子が、体調に支障がなければ15年ぶりに最後まで参加すると発表。

秋篠宮◆東京都港区の石垣記念ホールで、優れた林業関係者を表彰する式典に出席。式典後、表彰を受けた人々を祝福するパーティーに出席し、林業関係者と交流。

【11月9日】

天皇、皇族◆明仁、美智子「主催」の園遊会が東京・元赤坂の赤坂御苑で開かれる。雅子が15年ぶりに最後まで参加し、徳仁や秋篠宮、紀子、眞子ら成年皇族が

加わる。翌年4月30日の明仁の退位後、明仁、美智子は全ての「公的」な活動から退くため、今後は園遊会に出ることはなく、翌年は代替わりの儀式が続くため春は開かれず、秋も開催されない見通しと報道。

徳仁◆東京・渋谷のNHK放送センターを訪れ、教育コンテンツ国際コンクルの授賞式に出席。

代替わり◆自民党の総務会で、徳仁が新天皇に即位する2019年5月1日と「即位礼正殿の儀」が行われる19年10月22日を、その年一回限りの祝日扱いとする特別法案を正式了承。

元号◆政府が閣議で、翌年5月1日の新天皇即位に伴う新元号の公表時期について「国民生活への影響なども考慮しつつ、現在適切に検討を進めている」との答弁書を決意。

【11月11日】

佳子◆東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターで、全国から選ばれた中学生が学校生活や家族についてスピーチする「第40回少年の主張全国大会」に出席。

【11月12日】

秋篠宮、紀子◆東京・六本木にある国立新美術館を訪れ、開催中の日本美術展覧会（日展）を鑑賞。

【11月13日】

明仁、美智子◆宮内庁が、明仁、美智子が27日から1泊2日の日程で、静岡県を「私的旅行」で訪問すると発表。

美智子◆東京都千代田区の紀尾井ホール

を訪れ「難民を助ける会創立40周年記念チャリティコンサート」を鑑賞。

代替わり◆政府が、徳仁が新天皇に即位する2019年5月1日と「即位礼正殿の儀」が行われる19年10月22日を、その年一回限りの祝日として扱う特別法案を閣議決定し、衆院に提出。

【11月14日】

美智子◆日本赤十字社の名誉総裁を務める美智子が、東京・広尾の日赤医療センターを訪れ、ハンガリー出身の医師ゼンメルワイスの生誕200周年を記念した胸像の設置式典に出席。

【11月15日】

明仁、美智子◆空路日帰りで北海道を訪れ、最大震度7を記録し41人が死亡した9月の地震で、甚大な被害を受けた厚真町の被災者らを見舞う。北海道の高橋はるみ知事に金一封を贈る。夕方に帰京。

代替わり◆自民党の古屋圭司・元国家公安委員長が国会内で記者会見し、明仁の即位30年を祝う祭典を主催する超党派の「天皇陛下御即位30年奉祝国会議員連盟」を26日に発足させると発表。

【11月17日】

徳仁、雅子◆東京都臨海部の人工島「中央防波堤」にある海の森公園予定地を訪れ、第42回全国育樹祭の行事に出席し、約22年前に明仁、美智子が植えた樹木の枝打ちなど手入れをする。徳仁が夜、港区のホテルで育樹祭の懇談会に出席。

【11月18日】

美智子◆東京都渋谷区の国立能楽堂を訪れ、生前に親交があった作家の故石牟礼

道子の追悼公演で、石牟礼原作の新作能「沖宮」を鑑賞。

徳仁、雅子◆東京都調布市にある武蔵野の森総合スポーツプラザで、全国育樹祭の式典に出席。

【11月19日】

明仁、美智子◆東京・上野の日本学士院会館を訪れ、第34回国際生物学賞の授賞式に出席。／皇居・東御苑内の池にヒレナガニシキゴイを放流。

眞子◆東京都港区の明治記念館を訪れ、緑豊かな街づくりに貢献した地方公共団体や市民団体、企業などを表彰する「みどりの『わ』交流のつどい」に出席。

改元◆兵庫県篠山市の酒井隆明市長が、「丹波篠山市」への市名変更が住民投票で賛成多数となったことを受け、27日に臨時議会を開き、改名の条例案を提出すると、記者会見し明らかに。翌年5月の徳仁の新天皇即位に伴う改元に合わせて改名する方針を説明。

【11月20日】

明仁、美智子◆訪日中の西アフリカ・ブルキナファソのカボレ大統領夫妻を皇居・御所に招き懇談。宮内庁によると、大統領から、近年の気候変動により、砂漠が急速に広がっていることを聞いた明仁が「どのように対策されているのですか」と尋ねたというと報道。

徳仁◆東京都港区のサントリーホールで開かれたウイーン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートを鑑賞。

秋篠宮、紀子◆宮内庁が、秋篠宮、紀子が12月12・15日の日程でタイを訪問する

と発表。羽田発の民間機でタイに入り、同国では別々に行動、秋篠宮は、東北部にあるマハサラカム大の名誉博士号授与式などに臨み、紀子はバンコクで母子手帳国際会議などに出席すると報道。

代替わり◆政府が、皇位継承に伴う一連の儀式の詳細を検討する「式典委員会」（委員長・安倍晋三首相）の第2回会合を開く。首相「皇位継承まで半年を切った。2019年度予算案の編成に必要となる重要な諸事案を検討し、決定した」。新天皇の即位後に国内外の賓客を招く「饗宴の儀」を簡素化するためとして、参列者の範囲を前回より絞り、一部を立食形式にして回数を減らす方針を決める。「国民」に即位を披露するパレード「祝賀御列の儀」で使う車両は、安全性能に優れたオーブンカーを調達すると決める。儀式や祭祀の細部を詰める宮内庁の「大札委員会」の第2回会合が開かれ、翌年11月14・15日に皇居・東御苑で実施される代替わりの重要祭祀「大嘗祭」の中心儀式である「大嘗宮の儀」に、前回より約200人少ない700人程度を招待することを決める。

明仁、美智子◆訪日したヨルダンのアブドラ国王夫妻を皇居・御所に招き、共に昼食。玄関前で国王夫妻を迎える。

徳仁、雅子◆訪日したヨルダンのアブドラ国王夫妻の宿泊先で東京・日本橋のホテルを訪れ、国王夫妻と懇談。

代替わり◆明仁の即位30年を祝う祭典の準備に当たる超党派の「天皇陛下御即位30年奉祝国会議員連盟」が、東京・永田

できた七つの重要地方公務のうち、代替わり後は、高校総体を皇位継承順1位の「皇嗣」となる秋篠宮が、全国農業担い手サミットを故寛仁の妻信子がそれぞれ分担して継承する方向で調整が進められていることが、政府関係者への取材で分かる。残りの一部は新天皇となった徳仁が引き続き担うと報道。

徳仁、雅子◆東京都千代田区のホテルで開かれた「日本PTA創立70周年記念式典」に出席。

【11月22日】

徳仁、雅子◆訪日したモロッコのハスナ王女を、東京・元赤坂にある東宮御所に招き懇談。徳仁が車寄せで出迎える。

秋篠宮、紀子、悠仁◆悠仁が、自身が通うお茶の水女子大付属小（東京都文京区）の音楽会に参加。秋篠宮、紀子が鑑賞。

【11月23日】

明仁◆皇居・宮中三殿にある神嘉殿で執り行われた宮中祭祀「新嘗祭」に出席。

【11月25日】

承子◆全日本スカッシュ選手権大会の決勝戦を観戦。

【11月26日】

明仁、美智子◆訪日したヨルダンのアブドラ国王夫妻を皇居・御所に招き、共に昼食。玄関前で国王夫妻を迎える。

徳仁、雅子◆訪日したヨルダンのアブドラ国王夫妻の宿泊先で東京・日本橋のホテルを訪れ、国王夫妻と懇談。

代替わり◆明仁の即位30年を祝う祭典の準備に当たる超党派の「天皇陛下御即位30年奉祝国会議員連盟」が、東京・永田

町の憲政記念館で設立総会を開く。

【11月27日】

明仁、美智子◆「私的旅行」のためJRの特別列車で静岡県入り。掛川市で、女優宮城まり子が運営する養護施設「ねむの木学園」を訪ねる。敷地内の美術館で園生らが手掛けた絵画作品などを鑑賞。袋井市に移り、ベトナムの独立運動を支援した医師浅羽佐喜太郎の記念碑や、ゆかりの展示を見て回る。

徳仁◆東京・六本木の政策研究大学院大学を訪れ、「水と災害に関する国際シンポジウム」を聴講。

代替わり◆経済団体やスポーツなど各界の代表千人以上が参加する「天皇陛下御即位30年奉祝委員会」が、東京都内のホテルで設立総会を開く。

【11月28日】

明仁、美智子◆静岡県浜松市にある外国人学習支援センターを訪れ、訪日して間もない外国人向けの日本語の授業を視察。代替わり◆日本郵政の長門正貢社長が東京都内で記者会見し、天皇の代替わりに伴う10連休中の配達を検討する考えを表明。「前向きに何らかの対応を取りたい」。

【11月29日】

皇室ゆかり美術品◆文化庁が、皇室ゆかりの美術品などを紹介する特別展「両陛下と文化交流」を翌年3月5日～4月29日に東京国立博物館（東京）で開催すると発表。明仁の即位30年記念として宮内庁や読売新聞社などと共に主催すると報道。

【11月30日】

明仁、美智子、秋篠宮◆明仁、美智子が東京・元赤坂の秋篠宮邸を訪れて誕生日を祝う夕食会に参加。／秋篠宮が、明仁、美智子に誕生日のあいさつをするため皇居・御所を訪問。半蔵門を通る。

秋篠宮、紀子◆秋篠宮が53歳の誕生日を迎え、これに先立ち東京・元赤坂の宮邸で紀子と共に先立った記者会見の内容が公表される。「大嘗祭」について「宗教色が強いものを国費で賄うことが適当かどうか」「できる範囲で身の丈に合った儀式にする」ことが「本来の姿」と述べ、宮内庁の山本信一郎長官らに意見を伝えたが「話を聞く耳を持たなかった。残念」と批判したと報道。眞子と婚約が内定している小室圭について、金銭トラブルを念頭に国民に説明を尽くすよう求めたと報道。

練馬の会学習会「派兵時代の天皇制」
一〇月二五日（金）夜、練馬厚生文化



会館にて、練馬の会の第三回学習会が、講師に井上森さん（立川自衛隊監視テント村）をお招きして、二八名が集まり開催された。前回の同学習会では、ネット右翼が会場前に押しかけ、マイクでヘイト情宣を行い妨害されたが、今回は、彼らは来るのがなく、ほっと胸をなでおろした。

徳仁、雅子、久子◆徳仁、雅子が東京都千代田区の帝国ホテルを訪れ、高円宮杯全日本中学校英語弁論大会の70周年記念レセプションに出席。故高円宮の妻久子が出席。

秋篠宮発言◆菅義偉・官房長官が記者会見で、秋篠宮が「大嘗祭」への国費支出に疑問を呈したことに関し「改めて何らかの対応をすることは考えていない。記者からの質問に対し、あくまで殿下ご自身の考えを述べられたものだ」と述べ、国費を支出する政府方針に変更はないと強調。／秋篠宮が宮内庁の山本信一郎長官に対し「話を聞く耳を持たなかった」と批判したことについて、山本長官が記者会見で「そのようにお受け止めになったのであれば申し訳ない」と謝罪した上で「前回の皇位継承の儀式が、国民の賛同の下で行われたということを踏まえれば、前例踏襲は妥当である」。（今回も宮廷費で賄うことは）既に決定済み。その方針に従って準備を進める」と述べ、前回の費用について「有識者のヒアリングや内閣法制局との議論を積み重ねた」と訴え、秋篠宮にも前例踏襲の妥当性を説

井上さんは、長らく反戦運動と反天皇制運動に携わってきた立場から、「平成」時代の自衛隊海外派兵の拡大を、アキヒト＝平和天皇という言説の広がりの後支えしてきたことを証明された。具体的には、日本が経済・軍事上のアジアのトップランナーの地位から転落した【二〇〇五年】の前と後で分析を行い、二〇〇五年

明したと明かしたと報道。

代替わり◆翌年催される新天皇の「即位の礼」や皇位継承の重要儀式「大嘗祭」は、憲法が定める政教分離の原則に反するとして、市民団体「即位・大嘗祭違憲訴訟の会」が、国に1人当たり1万円の損害賠償と、儀式に公金を支出しないよう求める訴訟を、12月10日に東京地裁に起こすと明らかに。原告は、安倍晋三首相の靖国神社参拝違憲訴訟に関わってきた市民やキリスト教、仏教の宗教関係者ら約220人と報道。／衆院内閣委員会では、徳仁が天皇に即位する翌年5月1日と「即位礼正殿の儀」が行われる同10月22日を祝日とする特別法案を与野党の賛成多数により可決。採決に先立つ質疑で菅義偉・官房長官が、祝日とする理由について「天皇の即位に国民こそって祝意を表すため、これまでの立法例に倣った」。

天皇誕生日一般参賀◆宮内庁が、12月23日の天皇誕生日に皇居・宮殿の東庭で実施する一般参賀の要領を発表。参賀者の滞留対策として、初めて東庭に大型スクリーンを設置し、明仁らの様子を映し出すと報道。

以前は、アキヒト天皇は昭和天皇が出来なかつた皇室外交を積極的に展開し、欧米の旧連合国（フランス、オランダ）やアジア諸国（タイ、マレーシア、インドネシア、中国）を歴訪した。しかし、二〇〇五年以降はアメリカへの従属が深まる中で、天皇皇后の「テロとの戦争」容認発言が目立つ一方、アジア諸国と

の「上からの和解」は停滞する。一方、二〇〇五年を貫いて、天皇・皇后による戦死者の「慰霊・追悼」が続けられてきて、それは「昭和天皇は平和主義者」であり、天皇も民衆も軍部・軍国主義者の犠牲者であり、戦死者は「戦後日本の礎」であるという一貫した考えに裏打ちされていることを指摘された。そして、「二〇〇五年体制」を受け止めるのが、天皇制に對峙する反戦派の道である、と結論づけた。井上さんの、二〇〇五年を境に線引きをする状況分析は目からウロコで、また、天皇皇后の公的発言の細かい分析には目をみはった。質疑応答も積極的に行われ、「派兵時代の天皇制」について共通認識を深める機会となった。

次回は、二月二日（金）一八時半から、結成一周年集会「明治一五〇年」→近代天皇制国家を問う（講師・太田昌国さん・於・練馬区役所二〇階交流会場）。

（練馬の会／中川信明）

象徴『天皇陛下』万歳『反安倍（リベラル）』でいいのか？

一月一八日午後三時からピープルズ・プラン研究所で「『平成』代替りの政治を問う」連続講座の第8回「象徴『天皇陛下』万歳『反安倍（リベラル）』でいいのか？」が開催された。参加者は一六人。今回は、天野恵一さんが司会をし、白川真澄さん・平井玄さん・松井隆志さん・米沢薫さんの四名が問題提起をするという形で行われた。

まず天野さんから、九月に発行した「季刊ピープルズ・プラン」81号の特集「象徴『天皇陛下』万歳の『反安倍（リベラル）』でいいのか？」の説明があった。現在、「反安倍」の護憲運動や市民運動が高揚しているにも関わらず、なぜそれらの運動の中に天皇制批判や日米安保条約そのものの批判が無いのか、あるいは「反安倍」の立場を明確にした知識人や文化人の内の少なからぬ人がなぜ天皇賛美の文章を書くのか、を考察したかったとのこと。

白川さんからは、「天皇と安倍政治の間の矛盾・対立をどう見るか」「なぜ、『リベラル』派が天皇制になびくのか」「リベラルという問題」等について問題提起があった。

平井さんは、島蘭進・片山杜秀・内田樹・白井聡などの天皇擁護発言を分析しつつ、かつての知識人の月並みな転向パターンとの共通点もあるが、同時に現在は天皇制自体がグローバル時代に直面して大きな危機を迎えている、と指摘された。

松井さんは、特集の感想を中心に、「政治・社会の判断を、歴史的経緯を踏まえて（ベクトル）として」考えることの重要性」を思った、と話された。

米沢さんは、「宗教の問題から天皇制をとらえる」として、片山・島蘭の著「近代天皇論——『神聖』か、『象徴』か」を批判しつつ、「象徴」と「神聖」は対立する概念ではない、として、「象徴」の両義性——『記号』化と『実体化』偶像化「儀礼」（集団的象徴的行為）の問題」といった点について話された。

問題提起後の質疑応答を含め講座は三時間に及び、今回は熱の入ったものとなった。（講座運営委員会／田中）

東京育樹祭反対行動

一月一七・一八日、皇太子出席のもと、東京育樹祭が江東区の海の森公園予定地（二七日）と、調布市の武蔵の森総合スポーツプラザ（一八日）で開催された。

いわゆる天皇「三大行事」として植樹祭が毎年行われているが、天皇が植樹した地域を皇太子が訪れ、「お手入れ」をする儀式が育樹祭（全国国土緑化機構主催、林野庁後援）。今回のそれは、一九九六年の東京植樹祭に対応するものだ。今回「お手入れ」は海の森でおこなわれたが、五〇〇〇人規模の記念式典は、なぜか植樹祭とは関係のなかった武蔵の森総合スポーツプラザで行われた。

首都圏で反天皇制の共同行動をとるべく「終わりにしよう天皇制！『代替わり』反対ネットワーク」（おわてんねつと）のメンバーは、朝七時に式典会場に続く京王線飛田給駅前に集合し、ビラまき情宣を行なった。

式典開始は一〇時。にもかかわらずこんなに朝が早いのは、一般参加者は厳重なボディチェックを受けるために朝八時に集まることになっているからだ。つまりは、天皇警備のあたりでもある。

一人が集まり、横断幕を広げてハンドライクでアピール。最初はほとんど人が通らなかったが、しばらくして明らか

に市民の一般参加者がぞろぞろと通っていく。ビラの受け取りは悪くなく、一時間ほどで三〇〇枚近くがはけたが、反対運動の存在を想定していなかったためか、ビラを見てぎょっとした顔をした人もちらほら。

事前に想定していなかったのは権力の側も同じだったようだ。情宣を始めてしばらくすると、七、八人の私服がわらわらやって来て、写真を撮ったりしていたが、とくに介入はなかった。こいつらは、行動の終了後駅を移動して休憩のために入った店の近くまでついてきて、解散するまで監視していた。

なお、その日の午後、朝のビラまきに参加していたAさんが所用で近所に出ると、たまさか皇太子が通るといふ。立ち止まって眺めていたところ、二、三〇人の私服に二重三重にとり囲まれて封じ込められてしまった。ちなみに、式典会場から東宮御所に帰るためには遠回りになるコース。どこで寄り道をしたのか。皇太子の車が通り過ぎてようやくAさんは「解放」された。

天皇・皇族が行くところ、常に人権侵害が繰り返られるのだ。

（反天連／北野蒼）

終わりにしよう天皇制 2018 大集会&デモ

一月二五日、千駄ヶ谷区民会館で「終わりにしよう天皇制 2018 11・25大集会&デモ」が開催された。主催は（終わ

りにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク（おわてんねつと）。首都圏の、それぞれに課題を持ちながらも天皇制の問題を継続的に考えて来たグループが、これから一年、天皇の「代替わり」について議論し、行動をつくり出そうと集まってきた。構成メンバーは昨年以來、緩やかに共闘し続けてきた仲間たちで、反天連も参加している。これはその結成お披露目集会だ。

集会は、第一部、コント「忘れられないあの娘」と、栗原康さん講演。コントは昨年登場した気鋭の「芸人」。今回は声の新人も。栗原さんの講演「みんな天皇制がきらい」は、「大正時代」の天皇制批判として、金子文子や朴烈、大杉栄、幸徳秋水などの言葉を紹介しながら、当

時の天皇制・反天皇制の思想について語られ、象徴天皇制論にいきつく。当時の思想が、現代社会にも通じる部分も少なくなく、この変わらなさは恐い。

二部は「野戦之月」有志の会による芝居で幕開け。野戦之月が屋根・壁・床に囲まれて公演。そこは暗い皇居の「お堀」端か。河童に連れてこられた車いすの男と、そこに現れる怪しき者たちとの会話。会場はすっかりテントと化した。「野戦之月」とはおそらく一〇年ぶりのコラボで、嬉しい。

そして「3分で反対！天皇制」。東京琉球館の鳥袋マカト陽子さん、反五輪の会のいちむらみさこさん、女たちの戦争と平和資料館から池田弓子さん、即位・大嘗祭違憲訴訟の会から桜井大子が続々に

発言。まるで数本のコラムを一気に読まされた感。それぞれのテーマは切実で、凝縮された時間であった。最後に、おっちゃんズによる「元号やめよう」と「天皇制はいらないよ」の歌。元気倍増でデモ出発。

朱に金色の龍踊る縦断幕と旗やブラカード。原宿・渋谷の街に「終わりにしよう！天皇制」の声を響かせた。

（おわてんねつと／大子）

*おわてんねつとは団体賛同をつのづいてます。詳細は、呼びかけ文で（本紙チラシ参照）

10月26日（金）●原電包囲行動

11月9日（金）●即位・大嘗祭違憲訴訟の会・立ち上げ集会

11月10日（土）●連続講座 安倍改憲と憲法9条・第2回「自衛隊と防災・災害救助」

11月14日（水）●原発被ばく労災あらかぶさん損害訴訟第10回口頭弁論

11月17日（土）●ビープルズ・プラン研究所総会講演会

11月18日（日）●東京青樹祭反対情宣（集会の真相参照）

●「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第8回 象徴「天皇陛下」万歳の《反安倍》でいいのか？（集会の真相参照）

11月25日（土）●終わりにしよう天皇制2018大集会&デモ（集会の真相参照）

【学習会報告】

赤澤史朗『戦没者合祀と靖国神社』

（二〇一五年、吉川弘文館）

本書は靖国神社の合祀基準の変遷を豊富な資料でたどったものだが、極めて詳細である反面、分析や論理化が弱いとの感否めない。

遺族への金銭支給と靖国合祀はゆるやかに連動し、「慰霊・追悼・顕彰」を通じて戦死者再生産装置は機能し続けた。しかしよく見れば、戊辰戦争までは「雑多な軍隊」と言える程に様々な職種・階級・身分が入り混じっているものが、軍

人中心となり、警察官や軍役夫、民間人を合祀するか、戦病死や銃後の伝染病感染死などをどう扱うかをめぐって合祀基準は揺れ続ける。本書を通読すると、実は確固とした合祀基準などなく前例は忘れられ毎回場当たり的に事例を検討している実態が明らかになる。戦後は民間人の合祀が拡大し、戦争災害被災者も限

度はあるものの合祀されるようになっていく。

著者はそれを望ましい変化ととらえている。著者が望むのは、戦後の価値観に合わせて軍人だけでなく空襲被災者を含む多くの民間人をも「戦没者」として合祀する民主的で平和的な靖国である。国立追悼施設ですらない。もちろん国家による追悼の問題性や天皇制の問題などは視野にない。前著『靖国神社』を読んでもそれに気づかず、靖国解体企画で講演依頼をして断られたことがあったが、今ならそれも理解できる。ああ、僕たちのなんと間抜けなことよ！

僕が一番気になったのは軍役夫たちの存在である。戦争は軍人だけで行

ものでないことは、イラク戦争時にもクローズアップされた。軍夫、夫卒、傭人夫、雇員、傭人、馬丁、従卒、工夫等々と様々な呼び方をされた人々は、アンダークラスである僕の隣人、同僚たちだ。徴兵されずとも貧困層は戦争動員からは逃げられず、挙句「手段を選ばず利益を得ようとして参加」と死後も蔑まれる。それは僕たちの未来の姿でもあるのだろう。彼らのことをもっと知りたいのだが、研究書などあるのだろうか？ これから調べてみようか。

次回は橋川文三『ナシヨナリズム』（ちくま学芸文庫）を読む。（加藤匡通）

法政時報 INFORMATION

開催中 2019年2月17日 ● 日本人「慰安婦」の沈黙

13時～18時(月・火・休日休館) / W A M・女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅ほか) / 連絡先: 同館 (03-3202-4633)

12月5日(水) ● 元号いらない署名提出行動

13時 / 衆議院第一議員会館(地下鉄国会議事堂前駅ほか) / 主催: 元号はいらない署名運動 (090-3438-0263)

12月7日(金) ● 2020オリンピックボランティア動員? おかしいぞ! 本間龍さんを迎えて 学習講演会

18時開場 / 文京シビックセンター4F シルバーホール(地下鉄後楽園駅ほか) / 本間龍 / 主催: 「オリンピック災害」おこわり連絡会 (080-5052-0270)

12月14日(金) ● どうなっているの? どうなるの中東情勢

18時15分開場 / 練馬区民産業プラザ(こねり) 3F多目的室(西武池袋線ほか練馬駅中央北口) / 田原牧 / 主催: 戦争に協力しない! させない練馬アクション、憲法骨抜きNO! ねりま (090-5205-5803 池田)

12月15日(土) ● わたしたちの声を国連へ

13時30分開始・15時30分デモ / 青山学院大学17号館3F(地下鉄表参道駅ほか) / 主催: 国連・人権勧告の実現を! 実行委員会 (090-9804-1196 長谷川)

● 新たな天皇代替わりにどう立ち向かうか

13時30分 / 吾妻交流センター大会議室(TXつくば駅) / 中川信明 / 主催: 戦時下の現在を考える講座 (080-8441-1457 加藤)

● 改憲を先取りする新しい「防衛大綱」に反対する

17時30分 / 文京区民センター3C(地下鉄春日駅ほか) / 大内要三 / 主催: 大軍拡と基地強化にNO! アクション 2018 (03-3961-0212 北部労働者法律センターほか)

● 女天研講座特別編 ハンセン病患者が残した絵から見えてくるもの

18時15分開場 / 文京シビックセンター5F会議室AB(地下鉄後楽園駅ほか) / 蔵座江美 / 主催: 女性と天皇制研究会 (jotenken@yahoo.co.jp)

12月20日(木) ● 討論集会 今、改憲とどう向き合うのか

18時15分開場 / 南部労政会館(JR大崎駅) / 清水雅彦 / 主催: 戦争・治安・改憲NO! 総行動 (03-3591-1301 救援連絡センター)

12月21日(金) ● 「明治150年」近代天皇制国家を問う

18時30分予定 / 練馬区役所20F交流会場(西武池袋線ほか練馬駅) / 太田昌国 / 主催: アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会、協賛: 部落解放同盟練馬支部 (090-5205-5803 池田)

12月22日(土) ● 大杉栄「自叙伝・日本脱出記」第2回

18時 / シビル3F(JR立川駅) / 加藤晴康 / 主催: シビル (042-524-9014)

12月23日(日) ● A-1er t!! 「代替わり」状況へー反天連討論集会

15時開場 / 日本キリスト教会館4F(地下鉄早稲田駅ほか) / 天野恵一、小倉利丸、北野誉、桜井大子 / 主催: 反天皇制運動連絡会

● アジアから見た「天皇制」——「天皇代替わり」を前に知っておきたいこと——

13時30分 / 静岡県男女共同参画センターあざれあ(JR静岡駅) / 森正孝 / 主催: 天皇制を考える会静岡、映画「侵略」上映委員会 (080-6912-3623 山河)

● 天皇代替わり何が問題?

13時開場 / ウイルあいち1Fセミナールーム(名古屋市中地下鉄市役所駅) / 森英樹 / 主催: 代替わりを機に天皇制を考えるあいちネットワーク (090-6468-5536)

2019年1月12日(土) ● 大杉栄「自叙伝・日本脱出記」第3回

18時 / シビル3F(JR立川駅) / 加藤晴康 / 主催: シビル (042-524-9014)

● 終わってないぞ! DHC「ニュース女子」問題 沖縄ヘイトをゆるさない集い

18時 / 文京区民センター2A(地下鉄春日駅ほか) / 安田浩一 / 主催: 沖縄への偏見をおおる放送をゆるさない市民有志 (nonewsjoshi@gmail.com)

1月20日(日) ● 「平成」代替わりの政治を問う・連続講座第9回 象徴天皇制の戦争責任・戦後責任

14時30分開場 / ピールズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 伊藤晃、千本秀樹、天野恵一 / 主催: 同研究所 (03-6244-5749)

2月2日(土) ● 大杉栄「自叙伝・日本脱出記」第4回

18時 / シビル3F(JR立川駅) / 加藤晴康 / 主催: シビル (042-524-9014)

2月11日(日) ● 天皇「代替わり」に反対する2・11行動

13時30分開場予定 / 在日韓国YMCA 9F(JR水道橋駅ほか) / 主催: 同実行委員会 (090-3438-0263)



● 来年は忙しいぞ。みなさま、どうぞ一緒に! 太田さん連載はお休みで状況批評に登場! (木寛)

● これ以上の忙しさが待ってるなんて……、恐ろしい。みんな体には気をつけてね。(鰐)

● 忙しいに決まっている来年の予定の話をしながら鬼の方々がワイワイ盛り上がる。(蝙蝠)

● なんとともムチャクチャなスケジュールの活動が続いている。そして、もう年末である。なんといよいよ。(熊)

● いっただって忙しいと思って忙しがっていただけ、確かに忙しいかも。その分しわ寄せが。(猿)

● 「……最後の」というフレーズが溢れてる。これから春にかけてのいろいろを想つと怖いよ! 自愛の年末を! (貂)